九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

A Shared English Textbook as Basic Information for English Learners

Suzuki Yubunn.
Institute of Language and Cultures, Kyushu University

https://doi.org/10.15017/1271546

出版情報：英語英文学論叢. 50, pp.55-85, 2000-02. 九州大学英語英文学研究会
バージョン：
権利関係：

英語共通教科書の試み

鈴　木　右　文

1　導入

九州大学言語文化部英語科では，2000年度内の導入を目指して英語共通教科書を編纂中である。[注1] 筆者は4名からなる編集委員会のメンバーの1人として目下作業に従事しているが，本論は，大学における英語教育をめぐる状況から論をおこし，なぜ今共通教科書が必要なのか，またどのような考え方のもとでいかなる編纂方針を持つに至ったかをまとめた論考であり，編纂終盤の作業にフィードバックすることを目的としているが，学外の方々にも何らかのお役にたてば幸いである。

なお，執筆時点でこの共通教科書の編集方針・内容は英語科の最終的な承認を受けておらず，本稿で示される論点も特に断らない限り筆者個人の見解であることをお断りしておく。

第2節では，現在の大学英語教育を取り巻く状況から始めてその改革が共通教科書の導入に至るまでの経過を示し，第3節では九州大学における英語の履修体制について述べ，第4節ではそれらの状況からなぜ共通教科書を編纂することになったのかを明らかにし，第5節ではよりよい共通教科書を目指してどのような編纂方針を持つに至ったのかを示す。第6節以降では，共通教科書の各章について検討する。

2　大学の英語教育を取り巻く状況

日本の学校教育における英語教育はたびたび社会の中で批判されている。その多くは，中学校，高校，大学と英語の学習を進めながら，学生が英米人と日常会話程度のコミュニケーションもとれないという主旨のものである。

注1　九州大学出版会から出版の予定。九州大学の全学生がこれを学習することになるが，一般向けにも販売される予定である。九州大学での導入時期は，恐らく2000年度後期からで，全員履修となるのは2001年度からとなる。

確かに，筆者の本務校である九州大学に入学してくる学生たちに授業などを通じて彼らの英語運用能力を試してみると,「今日山田さんはどうしてお休みなんだと思いますか」「晩御飯のおかずに何を作ろうと思っていますか」といった簡単な問いかけにも英語で満足に返答できない者が多いし,「あなたの専門分野はどんなものか簡単に紹介してください」「あなたがひやっとした経験を話してください」などといった答えるのにストーリーの組み立てが必要なものにはなおさら答えられない。九州大学に限らず，英語教師であれば誰でも同じ思いであろうと思う。

こうした状況に関しては様々な要因が指摘されているが，中学・高校における英語教育が大学受験を意識したものであることが最大の理由であることは間違いない。大学入試の英語の問題の多くが筆記方式であるから，中学・高校での授業も読解が中心の授業にどうしてもなりがちである。しかも受験生の間で十分な点数の差が生じるように，問題に使用される文章は抽象的で高度なエッセイの類が多くなるから，読解力のレベルアップのためにかなりの労力をつぎ込まなければならない。従って音声面や口語表現に関する学習などは無視されるか，良くて二の次といったところである。してみれば大学の英語教師たるもの，入学試験の英語の出題にあたっては余程慎重にならなければならないわけだが，実際には，入学試験の規模からして筆記試験に頼らざるを得ず，口頭試問などによる英語運用能力の測定は物理的に無理である。しかし，全国の大学では2次試験においてヒアリングを課すところが増えてきており，ある程度の改善はなされてきている。

大学の英語教師にとって実行可能な改善がもうひとつあるとすれば，大学における英語教育そのものの改革である。これについてもある程度の改善が従来から積み重ねられて来ているが，今後もかなりの改革が期待できる。大学審議会答申路線の実現，独立行政法人化によって，大学における外国語教育も厳しい評価を受けて競争原理が導入され，授業の改善が学校間，教師間で競われることになりそうだからである。

しかし大学における英語教育は従来の改善に全く満足しない学生・世間の批判を浴びているのが実状である。実際，実践的な役には立たないものと指弾されて久しい。その批判の内容は，シェークスピアを始めとする文学作品の講読ばかりしていて，実用英語を軽視しており，受講生は教師の退屈な説明を長々と聞かされて頭を満足に回転させることもない，そのくせやたらと履修に負担がかかる，といったものに代表される。これには，大学における

外国語教育の担い手が，多くの場合英語教育方法についての専門的な訓練を受けたことのない文学部出身の文学・伝統的英語学の研究者であることに一因があった。

だが，よく言われるようにシェークスピアの英語ばかり読ませるなどということは誇張も甚だしい。九州大学におけるここ数年の採用教科書の表を眺めてみても，文学作品や英語学の本を読ませるといった授業は全体の１割か２割しかない。シェークスピアを読む授業はゼロである。これは，各教員が教材のバランスに配慮しているからであり，また，英語教育を専門とするネイティヴスピーカーやコミュニケーション系関連分野を研究分野とする教員が増加していることが１つの要因になっている。現在各大学の英語担当教員の公募条件に文学研究や伝統的英語学が指定されることは少なくなった。これは各大学が共通して実用的な英語教育にも力を入れて改革を進めていることを示している。

授業形態も多様化の一途を辿っている。講読一辺倒からの脱却の第１歩はＬＬの導入であった。その後表現力を養成する英作文の授業，ＣＡＬＬシステム（computer assisted language learning system）の導入などの展開を見せている。九州大学でも全く同様で，英語ＬＬ演習，英語表現演習という授業が登場した[注2]。ＣＡＬＬシステムも97年度に導入された。[注3]

この他，海外での語学研修や英語検定試験に対する単位認定など，実用英語に対する取り組みは着実に増加してきている。九州大学でも96年度からケンブリッジ大学での英語研修に対する支援が始まり，[注4] TOEIC, TOEFL, 英検の成績によって単位を認定する制度もまもなく導入される予定である。

注２　その後,「音声的な学習内容とＬＬ教室の利用を英語ＬＬ演習だけに限定することなく，どの授業でも音声面を取り入れることが必要で，ＬＬ教室はどの授業でも利用できるものでなければならない」との認識から，英語ＬＬ演習という特別な科目は廃止となった。英語表現演習はインテンシヴ英語演習と名称を変更した上で開講数を大幅に増加させた。

注３　九州大学に導入されたＣＡＬＬシステムに関しては拙稿鈴木（1998a，1998b）を参照。

注４　非公式なプログラムとしてケンブリッジ大学ペンブロークカレッジの夏期講座に毎年50名程度の学生が参加している。2001年度からは九州大学言語文化部とペンブロークカレッジとの学術交流協定のもとでの実施となる予定である。単位の認定は，大学としてこの語学研修そのものに対して行っているわけではなく，あくまで事後に教員が学力検査を実施し，教務委員会等の検討を経た上でその都度特別になされるものである。なお，この単位は必修の外国語のかわりにすることはできない。

こうして見てみると，講読型中心の授業体制から実用型も重視した授業体制へという流れが見てとれるが，大学における英語教育が実用型に向かって行き着くところまで行けばよいというものではない。大学における英語教育がどのようなものであるべきかを論じるとき，いわゆる教養主義と実用主義の対立に触れないわけにはいかない。大学における教育を大きく専門教育と一般教育とに2分したとき，外国語教育は一般教育の範疇に入る。従って，英語教育にも広く様々な知見を身につけるという教養的側面があり，小説やエッセイの講読によって異文化理解を目指すことは必要なことである。これに対し，国際化・高度情報化の世界をたくましく航海していくためには実践的語学力もまた必要である。教養的側面と実用的側面はいずれも必要なものであり，教養主義が実用主義にとってかわられるというものではなく，旧来の過多な教養主義が実用主義と幸福な共存関係を持つようになるというところをこそ目指すべきである。

ところがともすれば教養主義陣営と実用主義陣営で綱引きが行われることになる。教養主義陣営は，大学の入学者全員に履修させる授業の中では英語学習への動機が低い者もおり，わずか数単位の授業体系のなかで4技能ともに高いレベルへ持っていくのはどだい無理であり，その無理なことに労力を費やすよりも，高校までで培った読解力を延ばし，英語や英語圏の様々な側面に広く触れさせた方がはるかに意味があると主張する。これに対して実用主義陣営は，実践的語学力は専門教育の中でも卒業後の人生にもますます必要とされており，それの獲得には時間がかかるので，大学における英語教育はもっと実用英語に時間を割くべきであると主張する。いずれかの陣営が一方的勝利を収めるという事態は好ましくない。限られた時間の中で二兎を追うのがあるべき姿であるように思う。

それを可能とするには，筆者は2つのことにより大学での英語授業を講義型と演習型に二極化して効率化すべきであると考えている。一つはＣＡＬＬシステムを始めとするコンピュータの利用である。CD-ROMソフトは効率的で個人のペースに合ったヴィジュアルな楽しい学習を可能とし，WWWブラウザはリアルタイムの無尽蔵な英語情報へのアクセスを可能とし（しかも大学では無料！），電子メールは新しい英語コミュニケーションの場を提供した。九州大学では更に99年度から3年計画で外国語教育用3次元仮想空間チャットシステムを導入中である。[注5] こうしたコンピュータの利用は，英語教材を活字媒体以外のものにも拡大して学習意欲を高め，機械の助けを借りて

個人のペースに合わせた効率的な学習を可能にする。従って，短い時間でも旧来の授業より学習効果が大きい。演習型の授業にはぜひこうした設備を導入して実践的教養的学習をサポートすべきである。

今一つは本稿の主題である共通教材である。高校までの教科書は文部省の検定を受けることになっているが，大学では原則として使用する教材は自由である。大学の英語担当教員は，それぞれ個人が選定した教材を使用している。教養的側面を考えたとき，筆者は原則として教材が教師個人の選択に委ねられることに賛成である。大学側などから与えられる教材では，教員が自力で授業の内容を適切に選択し組み立てていく力が減退して，いずれ英語教育の沈滞を招く恐れがあるからである。だが，一部に共通教材を導入することもまた是である。教員が完全に自由に授業を行うのであれば，同じ大学でも教員によって授業の内容やレベルがばらばらといった事態が起こる。また，大学によってどのあたりを英語力の達成目標としているのかもわからない。そこで，当該大学の学生が目標とすべきレベルを示し，学生に共通項として学習させたい事項を扱う共通教材を作成し，講義型の授業で効率的に種蒔きをすることが望ましいと考える。この教材によって共通項を共有した学生が，それぞれのニーズにあわせてその他の特色ある演習型の授業へと進んでいけばよい（この場合，どのタイプの演習型の授業を履修するかは学生によって選択できるものである必要がある）。また共通教科書が「共通」であることのメリットも様々考えられる。例えば，再履修の学生にどういう授業を行うかの共通理解が従来持たれていなかったが，共通教科書の扱う範囲とレベルの学習で一定の成果をあげることを共通目標とすることができる。また，3年次への編入試験のレベルを明示することにもなるなど，共通教科書という「基準」を持つことの利点は計り知れない。ところでこの共通教材は，教養的種蒔きの側面と実用的種蒔きの側面を併せ持つものであるべきと考えるが，内

注5　このシステムは建造物を中心とした仮想空間をサイバースペースの中に作り，その中をユーザーがアバターと呼ばれる仮想人物の姿を借りて動き回り，同じようにして空間内に入ってきた他のユーザーと対話を交わすものである（現在は文字チャットであるが，まもなく音声チャットも可能となる）。空間内には大学の情報を提示したり，英語学習ソフトを組み込んだりすることができる。また，授業の実況中継を流すことができるので，遠隔授業にも応用できる。転送速度の問題は別途存在するが，従来の様々な革新をまとめて取り込んだ潜在力の高いシステムだと言えよう。このシステムの導入は九州大学教育研究プログラム・研究拠点形成プロジェクトの支援を受けている。

容に関する詳細は5節以降の各節に譲る。

3 九州大学における英語の履修方式

九州大学において，いわゆる第1外国語として英語を履修する場合（言語文化科目Ⅰという），文学部・教育学部・法学部・経済学部の文系学部（14クラス）の学生は卒業要件として7単位，工学部・理学部・農学部・薬学部・歯学部・医学部の理系学部（32クラス，2000年度からは31クラス）の学生は6単位修得しなければならない。単位を順調に取得した場合，1年次前期に2単位，1年次後期に2単位，2年次前期に文系で2単位理系で1単位，2年次後期に1単位をそれぞれ取得することになる。

1年次にはクラス単位で実施(40-60名規模)される総合英語演習[注6]を2単位，20名程度で実施されるインテンシヴ英語演習Ⅰ（表現能力の養成を主眼とする)を1単位，100名を越える大人数で実施される英米言語文化演習Ⅰを1単位修得する。[注7] この英米言語文化演習Ⅰこそが共通教科書の使用が予定されている科目である。インテンシヴ英語演習Ⅰが前期に実施されるクラスでは後期に英米言語文化演習Ⅰが開講され，逆に後期にインテンシヴ英語演習Ⅰが開講されるクラスでは前期に英米言語文化演習Ⅰが実施される。

2年次には原則として修得単位ごとに英米言語文化演習Ⅱかもしくはインテンシヴ英語演習Ⅱのいずれかを選択して履修する。[注8] 同一時限に英米言語文化演習Ⅱと複数のインテンシヴ英語演習Ⅱを開講し，どれか一つを選ぶことになる。英米言語文化演習Ⅱは共通教科書の使用を前提としない大規模授業であり，インテンシヴ英語演習Ⅱは，少人数で表現能力の大幅な向上を目指す内容別・レベル別の授業で，アラカルト的なメニュー，目的対応型の授業を揃えることができる。学生は実力と動機に応じて授業を選択することに

注6 ネイティヴスピーカーが担当する場合はネイティヴ英語演習という名称で呼ばれる。

注7 言語文化部系の大学院が2001年4月に発足予定であり，そうなると大学院教育にもあたる必要があるので，教員数に限りがあることからこのような大人数クラスが必要となる。しかし2000年度までは比較的余裕があるので，英米言語文化演習Ⅰのクラスで受講生が100名を越えるところはほとんどない。

注8 つまり，前期は英米言語文化演習Ⅱとインテンシヴ英語演習Ⅱ，後期はインテンシヴ英語演習Ⅱのように履修しても構わないし，どちらか一方のみで通すこともできる。

なる。これに対し従来型の英語の授業は固定したクラス単位で実施され，動機や実力の高低がばらばらな学生が集まっていて，不満を持つ学生がどうしても多くなるし，内容も特殊な目的のものにはできない。

この他，１年次の後期かもしくは２年次の前期に選抜英語演習が開講され，前学期に担当した教員の推薦と本人の希望があった場合，最大10名の特別クラスを受講することができる。このクラスでは相当にハイレベルな授業が行われる。

再履修の学生は従来面接の上で通常の授業に振り分けて受講させていた。しかしこのやり方では，英語の成績が不振な学生が多く振り分けられて進行に支障を来すような授業もでてくる。再履修の学生が再履修者を前提にした指導を受けられないという難点もある。そこで，再履修専用の授業（英語特別演習と言う）を設け，再履修者に合った方法で授業を展開することになった。

この他，必修単位には算入できないものの，特別履修課程を設けている。履修を希望する学生はプレースメントテストを受けて自分に合ったレベルの授業を受講する。リスニングやリーディングなど，目的ごとに特化させた内容を持ち，英語力の向上を望む者だけが受講する。これは近々言語文化科目IIとして広く開放される予定である。

また，2001年度から，外国語コミュニケーションコースというものが開設される。これは法学部・経済学部の学生が，３・４年次に法学や経済学を主専攻としながら副専攻として履修できるコースであり，英語コースとドイツ語コースが設定され，語学の演習のほかコミュニケーションに関する専門科目も開講される。このコースを選択する学生は，１・２年次の言語文化科目Ｉとあわせて，全年次に渡って卒業単位に含める形で英語を学習することができる。

4　英語共通教科書が導入される授業

九州大学で共通教科書を導入しようとしているのは，１年次に１単位開講される英米言語文化演習Ｉという100人を越える大規模な授業である。クラスによって前期または後期に開講される。この授業は，限られた条件の中でいかに実のある英語教育ができるかということを考えた末の一つの結論であった。

英語教育の充実を，単純に授業開講数の増加によって達成することはできない。九州大学では外国語教育の主幹部局は言語文化部であるが，専任教員の文部省定員は決まっており，増やすことはできない。非常勤講師をより多く雇用することも財政上無理であるし，非常勤講師に頼るのは責任体制上も望ましいものではない。また，そもそもこの大学教員多忙化の時代に喜んで非常勤に来てくれる人は少ない。

では外国語担当教員１人あたりの担当コマ数を増加させればよいかというと，それも難しい。言語文化部の１人当たり担当コマ数は原則として週５コマである。[注9] 学部所属の教官の標準的な担当コマ数である週３～４コマと比較して，現状でも外国語担当教員の負担は重く，これ以上の担当コマ数の増加などは望むべくもない。

こうした状況の中で授業体系の改善をはかろうとすれば，きめ細かく密度の濃い指導のできる少人数の授業を設定するかわりに大人数の授業も設けざるを得ないということになる。この場合，この大人数の授業が少人数の授業を成立させるための捨て石になるのか，それとも大人数の授業でも成果をあげて全体として改善となるのかは，大人数授業の内容にかかっていると言える。

東京大学でも少人数の授業を設けるかわりに大人数（100名を越える）の授業を設けている。この授業は有名になった *Universe of English, Expanding Universe of English*（東大出版会）を用いたものである。教科書自体は基本的に知的教養を目指したリーディングの教科書であるが，授業では内容に関係したビデオの聴解訓練も実施され，小テストも適宜実施される。しかし教員がほとんど一方的に話す一方通行型の授業である。[注10]

我々の編集委員会では，リーディング型の教科書をという結論にはならなかった。というのは，九州大学では英米言語文化演習とインテンシヴ英語演習という形で英語の授業が講義型と演習型とに分化してもらいたいので，リーディングの本格的な訓練は演習型の少人数の授業できめ細かい指導のもとに実施されるべきであり，講義型の大人数の授業では英語学習に必要な情報を与える（種蒔き）役割に徹するべきであろうと考えたからである。それは，

注９　大学院研究科の協力講座に所属している者は大学院での授業の他に平均週３．５コマである。

注10　筆者は過去実際に東京大学で授業を参観させていただき，授業遂行に関しての諸点を担当者から取材させていただいた。

少人数の授業では大人数の授業でもできることをしていたのでは意味がないから，大人数の授業では大人数でもできることに絞った方がよいということである。編集委員会では，大人数を相手にしてどのみち教員側からの一方通行になってしまう英米言語文化演習では，一方通行でも伝わる内容に徹し，すべての学生が共通項として身につけてほしい内容を大胆にまとめてみてはどうか，ということになった。共通の教科書にしてすべての学生に履修させようとする所以である。

「英語学習に必要な情報を与える」というのは具体的にはどういうことなのか。その解釈によって共通教科書の内容が大きく変わってくる。第5節では，準備中の共通教科書の内容と筆者の見解を突き合わせながら，「英語学習に必要な情報」とは何かを浮き彫りにしていく。

5　共通教科書の内容

まず結論としてどのような章で共通教科書が構成されるのか提示しておくことにする。[注11]

第1部
　書き下ろしの章
　　第1章　英語の勉強方法（和文）
　　第2章　英語音声学（和文）
　　第3章　語彙力をつけよう（和文）
　　第4章　表現力をつけよう（和文）
　　第5章　誤りやすい文法項目（和文）
　　第6章　電子メールでの英文作成法（英文）
　　第7章　英語の教養（英文）
　　第8章　英語圏の教養（英文）
　資料の章
　　第9章　日常生活の語彙
　　第10章　抽象語彙　覚えておきたい語彙
　　第11章　語彙の整理箱

注11　部や章の構成や標題は本稿校正時点での仮のものであり，必ずしも最終的なものとは限らない。

第12章　熟語
第13章　口語表現
第14章　補部
第15章　学部別語彙表現
第２部
注釈付の文章を20章分

分量としてはかなりあり，到底半期13回程度の授業回数ではこなしきれない。せっかく作るのであれば，教科書会社がよく製作するような薄くて，指示に従って進めれば授業の恰好がつくといったようなものは避けようと考えた。このような形式の教科書はどうしても内容が断片的になりがちで，カバーする範囲が狭くなる。共通教科書では思い切って網羅的な情報の与え方を採用し，ある程度厚いものになることは覚悟した。従ってこの共通教科書は英米言語文化演習Ｉで使用するのみならず，生涯手許に英語参考書として置いておけることを意識している。学生全員に購入させる教科書にこれだけの資料性を帯びさせることは好ましいことであろう。多少価格が高くても，一生役に立つことを考えればその難点を補って余りあるであろう。もっとも，実際の授業での扱い方は使用する教員に工夫の負担をかけることになる。例えば単語集の章を取り上げるとき，まさか最初からひとつひとつ見ていって時間が来たら途中でおしまいというわけにはいかない。従って，この教科書を使用する授業が一方通行の講義形式になって，学生とのやりとり次第で時間配分や構成などが予定外になることがないかわりに，素材をどのように授業に利用するかの入念な下準備が必要となる。従来型の教科書に比較して使いにくい教科書であるという評価が出てくることは当然と言えるが，この教科書の性質上ある程度仕方がないように思われる。

上記の構成を見れば一目瞭然だが，教師から一方通行の授業展開の中で学生に共通項としての基盤を与えることを狙いとする講義型の授業で使用される教科書であるのに，演習型の授業向けと思われるリーディングの素材が第２部としてかなりの分量含まれている。ひとつには，第１部のような内容ばかりだと受講する学生が飽きてくるといった理由もないことはない。しかしリーディングの章が多くあるのは，第１部で扱われている事項の具体例を提示するためでもある。かなり詳細にいわゆるクロスリファレンスを付し，第２部にあっては第１部の具体例の提示，第１部にあっては第２部に出現する

英語の性質の発展的網羅的学習という側面を持たせるわけである。

第2部だけ見れば，東京大学の *Universe of English* を始めとするリーディングの教科書と変わるところはない。この種の教科書は，授業で使用して満足すれば大抵の場合後になってまたひもとくということはあまりないであろう。しかし第1部と組み合わせることにより，何度でも開いて常に英語学習の指針とし，また調べ物の道具とすることができるようになっているのではないかと思われる。

6　第1章：英語の学習方法

特定の教材を用いて実施する授業では，その教材に取り組んで特定分野の学習効果を得ることが期待できるが，そもそも英語はどのように学習したらよいのかといった一般論が提示されていることは多くない。これは，教科書会社の出版する教科書がほとんどアラカルトメニューであって，レストランの選び方やマナーを学ぶ本になっていないということに原因がある。教員が授業の進行の過程のなかで散発的に一般論に言及することはあり得ても，体系的に教科書がそれを示すことにはなっていない場合が多い。学生は大学での英語の学習に対する心構えを固めることなくいきなりアラカルトメニューの前に座らされるのである。また，特定大学の学生として，どのような英語学習の態度と到達目標が期待されているのかといった点は市販の教科書では盛り込みようもない内容である。

そこで，大学自らが編集する教科書にはこれらの情報が提示されるべきであると考え，第1章でまず英語学習の一般的方法論を述べることとしている。具体的には以下の内容を持つ節から成立している。

1　この共通教科書の性格
2　四技能について
3　辞書（辞書の種類と推薦）
4　英語検定試験
5　英語教材の種類
6　実践的英語力獲得の勧め

共通教科書の性格から説きおこして，この教科書の内容が学習の到達目標を

示していることを述べ，英語学習の手段や英語能力の測定についてまとめ，最後に大学での英語学習が実践的英語力を伸ばすものであることを強調している。英語検定試験については単位を認可するのでひとつの到達目標としてその概略を述べ，学生に受験を勧めている。

7 第2章： 英語音声学

まず英語音声学を共通教科書に配置するのは，英語の音声面を学習の重点としたいからである。日本人の平均的大学生の英語の発音は全く英語の音声的特徴を意識せず，カタカナに直したものをそのまま読んでいるように聞こえる。英語と日本語とでは母音の音価に違いがあったり，同じと思える子音でも全く発音の仕方が異なる場合があったり，アクセントを置く方法が異なるといったことを発音に反映させられないどころか，相違があるという事実すら認識していないというのが実態である。文法事項に関してはかなり学習してきているのに，音声に関しては放置されていると言うに等しいこの状況は是非改善されなくてはならない。そこで，音声学の基礎の基礎に触れてもらおうというのがこの章の主旨である。

このような考え方には異論もあろう。通信手段の発達のおかげで，我々は英語圏以外の人々が報道向けに話す英語を聞くことができるが，強い訛りがあっても平気で実によくしゃべる。そのように母語の訛りがあっても通用するのだから，日本語訛りの英語を矯正する必要はなく，従って音声学など無用であるといった議論である。しかしこの議論は，英語は単に通じればよいという実用一点張りの学習理念を前提にしている。2節で見たように，大学における英語教育は教養面と実用面を兼ね備えていなければならず，実用に耐えさえすればよいというわけにはいかない。

教養として英語を通じ音声学のイロハの部分にだけでも触れておくことは，英語以外の外国語の習得にも役に立つ。初めてお目にかかるような耳新しい音も発音方法や調音点などの情報が与えられれば容易に聞き取ったり発音したりできるかもしれない。これは，高校までで学習した文法が，英語以外の外国語の習得の際にも応用できるのと同じことである。英語は通じればよいのだから文法はイロハ程度であっても不要だとは誰も考えていないと思うが，音声に関しても同じことだと思うのである。

また，実用の面でも音声面の知識は必要と思われる。平均的大学生が，そ

のまま放っておいても「通じる」発音をしているとはとても思えない。狙いとしては，なにもネイティヴスピーカー並にまで近づけようというわけではなく，「通じない」部分の発音を「通じる」レベルに引き上げようということである。非英語圏で話される訛った英語も，音価がずれているなどといったことはあるかもしれないが，英語らしい抑揚はちゃんとしていることが多い。そのレベルが到達目標と言っていいだろう。

8　第3章：　語彙力をつけよう

英語でコミュニケーションがとれると楽しいものだが，その反面，楽しいレベルのコミュニケーションのためには単語をたくさん憶えなければならない。単語を憶えるということに対して一般的に持たれているイメージは，つらい孤独な単純作業といったところである。しかし，言語が記号と意味の恣意的結合である限りは避けて通ることのできない作業である。

読書を重ねる中で出くわした単語を憶えていくというやり方もあるが，これではかなりの読書量をこなさなければならず，短期間に単語を増やそうとする観点から見て効率的だとはとても言えない。高校までの授業の中ではリーディングの教科書中心の学習ということになるから，出くわした単語を憶える方法が採用されていると言っていいが，大学受験を意識した個人学習の中では，単語集のようなものの力を借りて，ある程度強制的に頭の中に単語を流し込んでいる。効率が求められる受験勉強で強制注入が行われていることは，こちらの方法の方が効率的であることを証明している。だがその際，やみくもに単語を憶えていくのは最大限に効率的とは言えないし，そうした単調なやり方は普通人間が生理的に長時間受け入れ続けられるものではない。様々の種類の単語をまぜこぜにしてアルファベット順に憶えていくなどというやり方はその最たるものである。

そこで，単語の記憶作業をもっと容易にするため，様々の工夫が必要と思われる。例えば接頭辞を同じくする単語をひとまとめにするなどといったものである。どのような工夫がありうるかという具体的な点については第11章「語彙の整理箱」で取り扱うこととなっており，本論でも第16節で取り上げることとする。

従来こうしたことは個人でするべき術策であるという雰囲気があり，授業の中ではたまたま出くわした単語についての蘊蓄を散発的に傾けることはあ

っても，正面から体系的にまとめて取り上げるようなことはあまり行われて来なかったように思う。教養主義の観点からすれば，部分的に蘊蓄を傾けるだけでも学生は全体像のイメージがつかめるからそれで十分ということになるのかもしれないが，実用主義の観点からはイメージだけではコミュニケーションにならないので，実践的な単語征服方法をしっかりしかもある程度網羅的に教える必要がある。このような考え方から第3章では次のような単語の区分についての解説が記してある。

1　品詞分類
2　使用場面よる類別
　　1）日常語彙と抽象語彙　2）フォーマルとインフォーマル
3　形による類別
　　1）接頭辞　2）接尾辞　3）語尾　4）品詞変化
4　意味による類別
　　1）同義語　2）反対語
5　親疎による類別
　　1）和製英語　2）基本単語の意外な意味

さらに最後の部分で憶えるべき単語数の目安を示している。

9　第4章：　表現力をつけよう

表現力を身につける過程で単語を憶える必要があるのは確かだが，語彙獲得の際に付随して語よりも上位の句などのレベルについて身につけるべき情報が多々存在する。取り上げるトピックは以下のようなものである。

1　句動詞
2　前置詞付の動詞
3　他動詞構造
4　目的語文の中の動詞のタイプ

句動詞は一般に熟語の度合いが高いので，その意味は句動詞を構成しているひとつひとつの単語の持つ意味を合成して得られるものではない。例えば

give up の持つ「諦める」という意味は give と up の意味を足し合わせても出てこない。従って，単語だけ憶えても句動詞の意味まではカバーされないので，重要な表現能力の欠陥につながりかねない。

前置詞付の動詞は句動詞と似ているが，句動詞とは語順の可能性や修飾語句挿入の可否などで異なる。学生は一般にこの区別がわかっていないことが多い。このような区別が明確に理解されていないと思わぬ誤りにつながることがある。[注12]

他動詞の後に来るものは何かということについて，第4章ではＳＶＯＣについてそのパターンを確認している。動詞の後に何が来るかということについての学生の知識はほぼめちゃくちゃで，意味さえ通れば形は何でも良いと思っているようにさえ見えるので，ぜひこうした情報が必要である。ここではあえてＳＶＯＣだけに留め，他のパターンについては14章に譲っている（本稿では19節で取り上げる）。

以上のような各文法項目についてのしっかりとした理解は表現力のアップに確実につながる。細かい点は不要で，概略が伝わればよいという意見も考えられるが，それはビジネス文書やフォーマルな書状をしたためたことのない人の意見であろう。

目的語文の中の動詞の形式については，直説法なのか仮定法なのかということが主文の動詞によって決まっている。これも学生が苦手とする重要な区別であり，正確な理解が求められる。

第4章ではこの他，普通でない語順を用いることによる表現の拡大を扱っている。取り上げられている主な項目は以下の通りである。

1　新情報は文末に（例　I saw yesterday a tall gentleman with grey hair.）
2　文末重点の法則（例　It is fun to watch baseball game on television.）
3　話題を文頭へ（例　Hotdogs, I eat with mustard.）

注12　句動詞の give it up では give up, give up the plan のいずれも可能で give up it は不可能だが，前置詞付の動詞の approve of では approve of your decision は可能でも approve it of とは言わず approve of it となる。学生の間でこうした語順についての混乱がよく見受けられる。また句動詞では副詞を埋め込んで turn expectedly up とは言えないが，前置詞付の動詞では take (good) care of のように挿入語を埋め込むことができる。give up の up は副詞で，approve of の of は前置詞とされている。

4 倒置（例 In the doorway was an old lady.）
5 強調構文（例 What John bought was a car.）

いずれも標準的なものとは異なった語順によって特定の要素を特別に際だたせようとしている。ところが学生の作文を観察すると，この種の構文を採用している例は極めて少ない。一般に上記のような語順の変更が任意の場合に語順の変更を施すのは学生にとって苦手なところであるらしい。従って，これらの構文を取り上げてその適切な使用を推奨することは共通教科書として学生の筆力アップに寄与するものと思われる。このような語順の方が基本語順よりも自然であるような場合すらあることを思えば，ぜひ身につけたい構文である。

10 第5章： 誤りやすい文法項目

学生の作文を見ていると，共通して犯しやすい文法上の誤りのパターンというものが見えてくる。ほとんどの場合それは日英語の違いによるものであり，学生が日本語からの母語干渉を受けていることを示すものである。冠詞を落としてしまう誤りなどは日本語に冠詞がないからであることは明らかで，容易に予測できる間違いである。

しかし中には学生の作文を見て初めて気がつかされるパターンもある。例えば，主節を先，理由節を後にするとき，理由節を導く because を独立させて大文字で始めてしまい，I went to Fukuoka, because I wanted to visit Kyushu University. とすべきところを，I went to Fukuoka. Because I wanted to visit Kyushu University. などという不適切な文を作ってしまう。日本語では「僕は福岡に行った。九大を訪問したかったからである。」としても全く不自然でないので，これも日本語からの母語干渉によるものと言える。

母語干渉による文法上の誤りは種類が多くてとても単一の章で扱い切れるものではない。従ってこの章は網羅的という共通教科書の編集方針からして不十分かもしれないが，誤る確率の高いものを選んでいるので，作文上の参考に十分なるものと考えられる。

11　第6章：　電子メールの書き方

90年代半ばから爆発的にインターネットの利用が普及した。それまではコンピュータによる個人的な通信は特別な人の趣味にすぎなかったが，現在では有力企業や大学で電子メールを利用できる環境が整備されていないところなどは全く考えられない。[注13] こうして英文の読み書きの形態がひとつ増加したわけだが，電子メールには他の形態とは異なった特徴があり，それらをいわゆるネチケットとして学習する機会が学生に与えられるべきである。現に教科書会社の発行する教科書にもコンピュータで利用する英語に関係した内容を持つものも増えてきている。

電子メールでの注意点の例を挙げる。書式設定のない状態で送り手の側がメーラー上で改行を実行しないと，読み手の側のメーラーでメールを開いた場合，必ずしも送り手が意図した場所で改行されているわけではなく，「前の行にある例では」や「このメール自体文末で韻を踏んでいます」などという表現を用いるときは注意を要する。また，改行を実行しても，フォントのサイズが小さいと行が長くなり，読み手のメーラーのフォントサイズの設定が大きめであると，１行目は改行がなくてウィンドウの横幅いっぱいまで延び，２行目はわずかの単語数で改行されてしまうなどということが起こり，極めて読みにくい英文となってしまう。

こうしたことは日本語にも当てはまることなので，英語教育の担うべきものとは言えないが，昨今の英語教育のマルチメディア化を考えれば無視できないものである。

しかし英語に特有の問題もある。例えば英語ではイタリック体（それが利用不能なときは下線）で強調を表すという日本語にない特徴があるが，普通電子メールではイタリック体も下線も使えないので，強調には特殊な方法が必要となる。こうした面を見ても，ある程度電子環境での作文技法上の注意点に触れることが必要であろう。

なおこの章は電子メールのヘビーユーザーであるネイティヴスピーカーに

注13　現に九州大学では順次各種事務連絡を電子メールのみで行うように切り替え中である。全教官が電子メールを使用することが半ば前提とされている格好である。学生が利用できる端末の整備も特別に費用を工面して進められている。こうした現象は好むと好まざるとにかかわらず進行していく。

よって執筆されることになっており，英語話者同士での電子メールのやりとりから得られる知見が盛り込まれるものと期待される。

12 第7章： 英語の話題

「英語学習に必要な情報を与える」という場合に，英語の文法や語彙だけの学習では不十分である。英語が英語圏で実際に人々によって使用されてきている中で生じている諸特徴についても広く学ぶべきであろう。この章では次の4つの話題を取り上げ，ネイティヴスピーカーが英語で執筆する。

1 イギリス人と英語の起源
2 アメリカ英語とイギリス英語
3 英語と性差別
4 世界語としての英語とインターネット

従来こうした内容は授業の中で部分的にしかも教員の好みの範囲で「ついでに」扱われていた場合が多かったと思うが，ある程度まとめて共通基盤として扱うことが，これからの時代に求められる裾野の広い英語学習の一つの条件になるであろう。特にインターネットの普及により，4はタイムリーな主題といえる。

13 第8章： イギリス文化の話題

英語の学習には，英語圏の文化についての学習も含まれるべきである。英文の組立方だけわかっても，コミュニケーションをとる相手がどのような文化的社会的環境の中にいるのかということがわからなければ，大きな誤解が生じる恐れがある。特に日本での常識と異なっている側面については注意が必要であり，いわゆる異文化理解が求められる。予定としてはネイティヴスピーカーがイギリス文化の次のような話題について書き下ろす。

1 教育制度
2 政治と専制君主制
3 宗教

4　社会と階級制度
5　食物
6　経済と未来

どれも日本人にとってはよくわからないことばかりで，特に専制君主制によるイギリス連邦に関する知識は，99年11月にオーストラリアが国民投票で共和制への移行を否決し，エリザベス女王を君主とする立憲君主制の存続を決定したことから，タイムリーな内容と言えるだろう。

14　第9章：　日常生活の語彙

担当クラスの学生に授業を通じてアンケートを実施してみると，英語に関して最も不満を持っているのは自分が英会話が満足にできないことに対してである。中学・高校と6年間も英語を学習していながら，道を聞かれても英語で簡単な道案内すらできない自分を情けなく思い，大学の英語の授業がそれを解消してくれるようなものではないことにまた不満を持つのである。大学の授業に対して最も望むこととして圧倒的多数の学生が英会話（4技能で言えばスピーキング）の授業を望んでいるのに対し，そのような授業は，少なくとも九州大学では少数派である。

これらの学生の中学・高校時代の英語学習に決定的に欠けているのは日常語彙である。大学で英会話の力を伸ばしたいのであれば，日常語彙に強くなって欲しい。ここで言う日常語彙というのは例えば家庭用品である。じょうろ，きり，おたま，電子レンジなどに当たる英単語はと問えば，多くの学生がお手上げであろう。ホームステイに行ってそうした語彙の欠如の恐ろしさに初めて気が付くということになる。これは，大学受験にこのような語彙が必要とされず，中学・高校時代の授業において無視される傾向にあるからである。これらの語彙をしっかり身につければ，言いたいことが言葉にならないというフラストレーションはかなり解消されるはずである。

従って大学においてこれらの語彙を学習することには大いに意義がある。本章ではグループごとに分かれた日常語彙を掲載しており，概ね次のような構成になっている。

1　日用品：　おろし金，蛍光灯，おしめ，インターホンなど

2　生活：　年金，美容院，扶養家族，嫌煙権など
3　仕事：　同僚，残業，年公序列，終身雇用など
4　スポーツ：　腕立て伏せ，棒高跳び，フォアボールなど
この他，娯楽，旅行，食品・料理，マスコミ，警察・犯罪，環境，政治・司法，地質・地理，農業，貿易など

15　第10章：　抽象語彙

いったい英語学習者はどの程度の語数の英単語を身につければいいのだろうか。学習英和辞典を見れば，3000語レベル，6000語レベル，もしくは高校レベル，大学一般教養レベルなどといったマークを見出し語に付している。検定試験のガイドブックであれば合格水準の単語数を示し，その試験に頻出する単語の種類の偏りについて解説している。大学の場合も外国語教育の目的というものがあるのだから，それに合わせた適当な数と中身が考えられるはずだ。しかしそうしたガイドラインを学生に示している大学はそう多くないであろう。だが自らの教育結果に責任を持つためには，こうした基準すら設定しない（達成させられるかどうかは別として）のは怠慢とさえ言える。

そこで九州大学の学生として学ぶべき英単語はどういったものかを考え，それを公表する必要が出てくる。一般教育の中の外国語教育であるから，教養的側面も実用的側面もいずれも必要である。実用的な語彙に関しては第9章で取り上げているので，第10章では教養としての語彙を取り扱うこととした。とすれば中身は抽象的なものになる。人間の知的活動は概念を操作することによって成り立つ面もあるのだから，しっかり抽象的な語彙を身につけることは大切なことである。

時折，単語集などというものはそれこそ星の数ほどあるわけで，今更そのようなものを新たに作成することに精力を割くのはエネルギーの無駄遣いではないかという意見をいただくが，既存の単語集を採用すればそれだけ学生にとって教材費がかかる。また，実際はなかなか満足なものに出会うことがないものであり，自作がかえって近道である。

単語集を共通教科書に含める理由は他に幾つもある。九州大学の学生が習得すべき英単語が設定されていれば，授業の中で特定の単語を既習扱いしてよいか，語義を知らない学生を責めてよいかといった点にひとつの基準を与

注14　この点はもともと同僚の田中俊也助教授の意見である。

えてくれるし,[注14] 九州大学の学生にとっての文章の難易度をこのリストにない語が占める割合で客観的に測定することができるようになり，使用教科書の選定や将来の共通実力試験のレベルの調整にも役に立つだろう。また，この教科書が市販されれば，九州大学の受験生が受験のための勉強から大学での学習につなげるための勉強という本来あるべき姿に切り替えるための一助になるかもしれない。更に，学内の英語のボキャブラリーコンテストなどにも利用価値が出てくるだろう。

では実際単語の採否はどのような基準によればよいか。これは大学によって異なるわけで，単語をひとつひとつ見ていくより他にないであろう。膨大な作業量になることが予想されるが，作業に加わることで教員の側に自分の学生にとって必要なものは何かということを考えるきっかけになるという意味もあるように思う。

また，この語彙集には例文がついている。文脈を与えることでそれぞれの語彙が持つニュアンスを伝えることができるからであり，実際の文の中で意味がとれるかどうかを試してみないと本当にその単語の意味を了解したことにならないからである。これによっても作業は膨大なものになるが，この語彙集は今後ずっと利用していけるものなので，労を厭わず完成させようと考えている。

16　第11章：　語彙の整理箱

この章は第3章の実践編と言える。単語はなるべく相互に関係づけて記憶を定着させたほうがよい。そのためには単語を種類も考えず単純にアルファベット順で提示するごときはもっとも避けるべき非能率的な方法である。本章は以下に挙げる語彙の整理方法の多くを含むものである。このようにして束ねられた単語は何も工夫がない場合に比べてはるかに印象に残りやすく，記憶に留まりやすいものと思われる。

1　同義語
2　反対語
3　外来語
4　和製英語
5　接頭辞

6 接尾辞
7 基本単語の意外な意味

同義語は記憶の便だけでなく，英語の特徴とも関連している。英語では文章の流れの中で同一の表現を繰り返し使用することはなるべく避けるのがよいとされている。例えば，Mr Rawlings を適宜 he, the man, the doctor などと言い換えていく。これに対し日本語では何度「ローリングズ氏」と繰り返してもさほど不自然ではない。従って，母語干渉により学生は英作文においても同一表現を繰り返す傾向にある。名前の他，欲求は何でも I want，意見の表明は何でも I think，といった具合である。そこで，同義語を言い換え表現として意識するならば，これらを同時に身につけるのは英作文の技量向上にも一役買うというわけである。

反対語についても表現を豊かにする側面がある。同じ内容を言い表す場合でも，反対語と否定表現を組み合わせることで表現の幅が広がる。is large を is not small とするだけでも is large を繰り返すより能がある。

外来語はなまじ日本語にカタカナとなって入り込んでいるだけに，なかなか正確なスペリングや発音を改めて身につけようとは思わないものである。例えば，silhouette（シルエット），campaign（キャンペーン）を正確に綴れるだろうか。referee（レフリー）を第1音節でなく，最終音節に強勢を置いて読んでいるだろうか。platform（プラットホーム）を /f/ の音で発音しているだろうか。ここでは学生に正確な事実をしっかりと把握する機会を提供しているつもりである。

その意味では，和製英語もそれと知らずに使ってしまうことがあるので，英語では本来何と表現するのかを知っておく必要がある。例えば，a happy ending を「ハッピーエンド」という日本語の表現から a happy end としてしまうような誤りをなくしていこうというのが趣旨である。

接頭辞・接尾辞についてもただ単にまとめて憶えたら効率がよいというだけのことではない。リストを眺めているうちに，初めて出会う語にどの接頭辞，接尾辞をつけたらよいか勘でわかるようになってくる面がある。例えば名詞化するときに -tion にするのか -ment にするのかといった場合のことである。

基本単語の意外な意味というのは，例えば try が「試みる」の他に持っている「酷使する」という意味である。このように最もよく用いられる意味の他

に重要な第2またはそれ以下の意味を持つ単語というのは，中学校で学習するような学習初期に出会う基本単語が多いので，マイナーな意味についてはきちんと調べないことが多い。こうした語彙をまとめて見ることで，英文解釈の際の注意力喚起に少しは役に立つのではないかと思われる。

17　第12章：　熟語

本章では基本単語ごとに関連イディオム表現を列挙し，例文を付している。採用されている単語は以下のようなものである。

break, bring, carry, come, do, get, give, go, have, keep, let, look, make, pull, put, see, take, work

熟語も取りまとめて憶えた方が効率的であるが，それぞれの基本単語が持つ意味が改めて浮かび上がってくるという効果もあるだろう。

18　第13章：　口語表現

英語学習の実用的側面の中で最も必要とされるのはいわゆるサバイバルイングリッシュの表現であろう。旅行英会話や「朝起きてから寝るまでの英語表現」などという本がよく売れるのも当然である。しかし漫然と会話表現を羅列するのではいただけない。本章では次のような場面別の構成とした。

1　一日の動作
2　体の動き
3　旅行
4　電話
5　料理
6　挨拶
7　買物
8　健康
9　学校生活
10　銀行

11 感情
12 ビジネス
13 緊急
14 英語らしい口語表現
15 ものの数え方

1から13までのグループ分けに関しては市販の英会話の本と比べて特に大きな特徴はない。生活の場面で話すことになりそうな表現を選定した。

14はこの章の特徴と言えるだろう。どんな分野でも同じことだが，ああそうかと軽い感動をもって理解したときは，記憶がはっきりと残る。英語表現についても，なるほどそう言うのかという感心が記憶を定着させる。14ではそのような英語らしい，知って得をしたと思うような表現を集めた。

15は英語と日本語の大きなギャップを埋める試みの一つである。日本語も本，枚，冊，着とものの数え方がいろいろであるが，英語も不加算名詞を数えたり，群れを表す単語が豊富であったりと，やっかいな面がある。こうした英語特有の面をきちんと学習させることは，正確な表現能力の獲得という点のみならず，英語または英語圏のものの捉え方を理解する上でも望ましいことである。例えば群れを表す単語が特定の動物に多いのは，それらの動物が家畜として英語文化圏で馴染み深い存在であることを示している。

19 第14章： 補部

学生の作文指導にあたって痛切に感じるのは，個々の単語が何を補部としてとるのかに関する知識がかなり曖昧だということである。例えば，I want that John will win the race. とか I told with Bill. などという間違いがおびただしく見られる。試しに40名弱の学生に want と hope が取りうる補部のパターンを例文の形で書き出させてみたが，いずれも正解という者は皆無であり，大抵は半分程度の正答率であった。

動詞や形容詞が述部になっている文では，これらの動詞や形容詞が文の中核を成しており，それらが補部に何を取るかが曖昧なままでは正確な英作文はできず，ましてや自信をもって英語を話すこともできないであろう。そこでぜひとも基本的な語彙について，取りうる（取り得ない）補部のパターンをしっかり身につけて欲しいものと考える。こうした情報は表現力養成のひ

とつの特効薬的存在になりうるのではないかと思う。

本章では下記の動詞や形容詞を選定し，それぞれについて，各パターンの可否を示す表を作成した。これは第4章の一部の具体化である。

1 「思う」think, consider, believe, suppose, feel, guess
2 「望む（動詞）」want, hope, desire, wish
3 「望む（形容詞）」eager, anxious, zealous, keen
4 「話す」say, tell, speak, talk
5 「要求する」request, require, demand, claim
6 「許す」allow, permit, approve
7 「非難する」blame, criticize, condemn
8 「禁じる」prohibit, forbid, ban
9 「抑止する」prevent, bar, inhibit, stop
10 「得る」get, gain, obtain, earn, acquire, win
11 「強制する」force, compel, oblige
12 「与える」give, present, provide, supply, award, grant
13 「奪う」take, deprive, rob, steal
14 「断る」refuse, reject, decline

作文上推奨できるかどうかを主眼に見たので，文法上の事実とは若干異なっていたり，単純に割り切り過ぎたりしている部分はあるかと思うが，これを用いて作文の宿題を出したりすることには意味があると思う。

この他番外編として，動詞を軽動詞＋名詞で言い換えるパターンのリストを付した。例えば cry → give a cry, argue with him → have an argument, analyze the result → make an analysis of the result, depend on him → put dependence on him, leap → take a leap のように，言い換えをしたときにどのような軽動詞を用いるかについての体系的知識というか勘を身につけて欲しいという願いを込めたリストである。これは動詞的表現の多い日本語を母語とする学生が名詞的表現の多い英語をより英語らしく書けるようにいう願いを込めたものである。

20 第15章： 学部別語彙・表現

大学１・２年次の外国語科目としての英語で実際に何が教えられているかを調べるために九州大学で個々の教員が使用している教材を見てみると，学生の所属学部を意識したものが使われていることも少なくない。教員には文学系統の研究者が多いので，文学部の学生向けに小説を採用するのは昔からあることだが，文学部以外の学生向けに教材を選定していると思われるケースもある。例えば，経済学部の学生向けに経済時事問題の報道記事を取り扱う，工学部・理学部の学生向けに数字・図形表現の演習を行う，農学部の学生向けにバイオテクノロジーに関する記事を集めて読むといったケースである。

こうした動きは，個々の教員が外国語教育に大学の専門教育につなげる役割を少なくとも部分的に認めているということを示している。外国語教育を含めた一般教育も専門教育も同じ大学における教育を担っている以上，相互に協力関係があるべきであると考えられ，専門教育の中で英語で書かれた専門書を読む訓練が実施されている学部（理系を含む）があるように，外国語教育の一部に専門教育につながる部分が含まれているのも歓迎されるべきことであると思われる。その一つの試みが本章で提示される学部別語彙・表現である。[注15]

提示する語彙には，各専門分野の用語などのうちで，専門以外の学生にとっても役にたつことのありそうな範囲内のものを選定した。従って専門の勉強を英語で本格的に取り組むという場合には物足りない内容であろうし，一般的な単語集として眺めた場合にはかなり突っ込んだ内容に見えることであろう。構成は以下のとおりである。[注16]

注15 しかし外国語教育はあくまで一般教育なので，専門教育につなげる部分というのは限定的にしか実施できない。制度としては恐らく，英米言語文化演習Ｉの共通教科書で専門分野の語彙を一部学んでもらう他は，２年次に実施される選択制の枠の中で幾分学部の専門に合わせて外国語担当教員の手に負える範囲内の学習が行われることになる程度のことになるであろう（もちろんこの他に教員が担当クラスに応じて自発的に教材を限定することはあるであろう）。従って語彙の選定にあたってはそれぞれの専門部局で実施されている専門教育の詳細を調査するなどいったことはなかった。

注16 項目の中には題目だけで中身は他章や他の情報ソースに譲る分もある。

1　文学部系
- 学問分野の呼称
- 哲学（人名，哲学用語，宗教）
- 歴史（人名，戦争，国名・王朝名，歴史事項，英米歴史年表）
- 文学（人名，爵位，日中古典，文学用語）
- 言語学
- 美術（人名，美術用語）
- 音楽（人名，楽器，音楽用語）
- 映画（監督，男優，女優，作品，邦画英題）

2　教育学部系
- 学問分野呼称
- 教育（人名，学校種別，学校行事，組織，職種，試験・成績，日課，子育て問題）
- 心理学（人名，心理学用語）

3　法学部・経済学部系
- 学問分野呼称
- 各種機関（国内，国外）
- 政治（人名，政党，政治用語，法律，条約等）
- 国名
- 世界地理（人名，都市，海，湾，湖，海峡，運河，川，山脈，山，岬，砂漠，高原，盆地，島，半島，列島・諸島，大学）
- 経営・労働（人名，労働関係用語，経済・経営関係用語）
- 経済（人名，税金，経済用語）

4　工学部・理学部系
- 学問分野呼称
- 実験器具
- 物質（人名，元素，物質，粒子）
- 単位（長さ，重さ，面積，体積，数字）
- 数学（人名，幾何，代数，数式表現）
- 天文（人名，天体）
- 地学（地震，岩石）
- コンピュータ
- 科学技術（電子技術，材料技術，原子力，機械）

・物理（光，波，力学，電磁気）
・化学
・地形
・気象

5　農学部系
・学問分野呼称
・生物（階層，細胞）
・動物（人名，動物用語，脊椎動物，無脊椎動物，鳴き声の動詞）
・植物（人名，植物用語，胞子植物，種子植物）
・環境

6　医学部・歯学部・薬学部系
・学問分野呼称
・薬品（薬品種類，個別薬品）
・栄養
・人名
・身体，内蔵（目，耳，口内，内蔵，骨，筋肉，部位，顔，頭，指，性器，血（管），脳，神経）
・怪我等
・病気（感染症，性病，皮膚病，目，心臓，脳，肺，肝臓）
・病状
・病院，治療（医師種類，設備等，治療・処置，出産関係）

文理を問わず，国際化・学際化の趨勢に沿って，研究発表や共同研究が国際舞台で行われることが最近増えてきた。研究発表のために英語の使用が当然となりつつあるし，学生の国際交流の場面を考えても，せめて自分の専門分野について英語で語るだけの力は身につけたいものである。その場合まず取り組むべきは自分の分野の専門用語の習得ということになる。

しかし共通教科書としては高度に専門的な語彙を網羅的に掲載することは非効率的である。そのような語彙は専門教育の中で取り上げられるべきである。15章ではなるべくどの分野の学生にも意味があるように，一般常識の範囲に入るような語彙を選定したのは既述のとおりである。

また歴史，文学，美術，音楽，映画といった分野は，知的生活を送るべき学生にとって身につけたい教養である。題目だけ憶えるのではなく，ぜひ他

の書物をひもといたり，実際の作品に触れるなどして英語の学習を知的文化的悦びの世界と関連づけて欲しい。

21　終わりに

この共通教科書の製作にはかなりの時間がかかっている。それは準備時間にひとつひとつの語彙・項目を製作者自らあぶり出してそれをかみしめるように学ぶ過程が含まれているからである。選定にあたってはまず自分の知る範囲のものを書き出し，それを様々の資料から補強するという形を採った。あるときは化学の実験を頭に浮かべ，またあるときは歴史上の人物に不満をぶちまけながら作業をした。このことが語彙の選択や配置順その他の方針に影響を与えていると思うが，機械的な作業としなかったことで何らかの長所が生まれていることを祈る。例えばそれぞれの専門の入門書をスキャナーで読み取り，出現頻度を調べれば数理的に正確なものがもっと短い時間で一応の形を成したかもしれないが，我々は手作りにこだわった。非科学的な態度かもしれないが，教科書の中身自体が機械的な香りのするものだけに，それとは反対に人間的な痕跡を残そうとして，ぬくもりを感じるような出来映えを狙った。この教科書で学習することになる学生にもその熱意が伝わることを願う。

既述のとおり内容として英語のメカニックな側面に偏りがあるのは否めないのだが，そのメカニックな面にしても句読法など抜け落ちている面がある。もっと大きな目で見た場合，パラグラフの組立方法，効果的な議論の仕方といったものも欠けている。これらはひとえに編集委員の力不足による。多くの英語教育研究者からは稚拙な教科書に見えるかもしれないが，実際に持っている力以上のものはできないので仕方がない。将来の改訂版での善処が必要であろう。

参考文献

鈴木右文（1998a）「ＣＡＬＬ教室におけるコンピュータのセキュリティについて—九州大学を例に—」『英語英文学論叢』（九州大学英語英文学研究会）第48集，1-16

鈴木右文（1998b）「ＣＡＬＬシステムによる外国語教育とその諸問題—新規導入した九州大学の場合—」『言語文化論究』（九州大学言語文化部）No.9，161-172